

# 「古事記と日本書紀」

—黄泉国訪問の話をやむ—

群馬県立女子大学 北川 和 秀

## 【古事記】

伊耶那岐命・伊耶那美命は、「ただよつてゐる国を修理固成せよ」という天神の命を受け、大八洲（日本列島）やその他の島々を生んだ。それに続き、山川草木等の諸々の神々を生んだ。しかし、火の神である迦具土神を生んだために、伊耶那美命は火傷をして亡くなつてしまつた。

故尔くして、伊耶那岐命の詔はく、「愛しき我がなに妹の命や、子の一つ木に易らむと謂ふや」とのりたまひて、乃ち御枕方に匍匐ひ、御足方に匍匐ひて哭きし時に、御涙に成れる神は、香山の畝尾の木本に坐す、名は泣沢女神ぞ。故、其の、神避れる伊耶那美神は、出雲国と伯伎国との堺の比婆之山に葬りき。

是に伊耶那岐命、御佩かしたる十拳の剣を抜きて、其の子迦具土神の頸を斬りき。尔くして、其の御刀の前に著ける血、湯津石村に走り就きて、成れる神の名は、石拆神。次に、根拆神。次に、石筒之男神三はしらの神。次に、御刀の本に著ける血も亦、湯津石村に走り就きて、成れる神の名は、甕速日神。次に、極速日神。次に、建御雷之男神。亦の名は、建布都神。亦の名は、豊布都神三はしらの神。次に、御刀の手上に集まれる血、手俣より漏き出でて、成れる神の名は、闇淤加美神。次に、闇御津羽神。

上の件の石拆神より以下、闇御津羽神より以前、并せて八はしらの神は、御刀に因りて生める神ぞ。

殺さえし迦具土神の頭に成れる神の名は、正鹿山津見神。次に、胸に成れる神の名は、淤藤山津見神。次に、腹に成れる神の名は、奥山津見神。次に、陰に成れる神の名は、闇山津見神。次に、左の手に成れる神の名は、志藝山津見神。次に、右の手に成れる神の名は、羽山津見神。次に、左の足に成れる神の名は、原山津見神。次に、右の足に成れる神の名は、戸山津見神。正鹿山津見神より戸山津見神に至るまでは、并せて八はしらの神ぞ。故、斬れる刀の名は、天之尾羽張と謂ふ。亦の名は伊都之尾羽張と謂ふ。

是に、其の妹伊耶那美命を相見むと欲ひて、黄泉国に追ひ往きき。尔くして、殿の藤戸より出で向へし時に、伊耶那岐命の語りて詔ひしく、「愛しき我がなに妹の命、吾と汝と作れる国、未だ作り竟らず。故、還るべし」とのりたまひき。尔くして、伊耶那美命の答へて白さく、「悔しきかも、速く来ねば、吾は黄泉戸嚙を為つ。然れども、愛しき我がなせの命の入り来坐せる事、恐きが故に、還らむと欲ふ。且く黄泉神と相論はむ。我を視ること莫れ」と、

如此白して、其の殿の内に還り入る間、甚久しくて、待つこと難し。故、左の御みづらに刺せる湯津々間櫛の男柱を一箇取り闕きて、一つ火を燭して入り見し時に、うじたかれころるきて、頭には大雷居り、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰には析雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足には伏雷居り、并せて八くさの雷の神、成り居りき。

是に、伊耶那岐命、見畏みて逃げ還る時に、其の妹伊耶那美命の言はく、「吾に辱を見しめつ」といひて、即ち予母都志許売を遣して、追はしめき。尔くして、伊耶那岐命、黒き御縷を取りて投げ棄つるに、乃ち蒲生子りき。是を摭ひ食む間に、逃げ行きき。猶追ひき。亦、其の右の御みづらに刺せる湯津々間櫛を引き闕きて投げ棄つるに、乃ち笋生りき。是を抜き食む間に、逃げ行きき。且、後には、其の八くさの雷の神に、千五百の黄泉軍を副へて追はしめき。尔くして、御佩かしせる十拳の劍を抜きて、後手にふきつつ、逃げ来つ。猶追ひき。黄泉ひら坂の坂本に到りし時に、其の坂本に在る桃子を三箇取りて待ち撃ちしかば、悉く坂を返りき。尔くして、伊耶那岐命、桃子に告らさく、「汝、吾を助けしが如く、葦原中国に所有る、うつしき青人草の、苦しき瀬に落ちて患へ惚む時に、助くべし」と、告らし、名を賜ひて意富加牟豆美命と号けき。

最も後に、其の妹伊耶那美命、身自ら追ひ来つ。尔くして、千引の石を其の黄泉ひら坂に引き塞ぎ、其の石を中に置き、各対き立ちて、事戸を度す時に、伊耶那美命の言ひしく、「愛しき我がなせの命、如此為ば、汝が国の人草を、一日に千頭絞り殺さむ」といひき。尔くして、伊耶那岐命の詔ひしく、「愛しき我がな妹の命、汝然為ば、吾一日に千五百の産屋を立てむ」とのりたまひき。是を以ちて、一日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人生るるぞ。故、其の伊耶那美命を号けて黄泉津大神と謂ふ。亦云はく、其の追ひしきを以て、道敷大神と号く。亦、其の黄泉坂を塞げる石は、道反之大神と号く。亦、塞り坐す黄泉戸大神と謂ふ。故、其の所謂る黄泉ひら坂は、今、出雲国の伊賦夜坂と謂ふ。

黄泉国から帰った伊耶那岐命は、身の汚れを清めるために九州の阿波岐原でみそぎをした。その過程で様々な神々が生まれた。そして最後に、天照大御神・月読命・須佐之男命という三貴子が生まれた。伊耶那岐命は、天照大御神には高天原を、月読命には夜之食国を、須佐之男命には海原を、それぞれ治めるように命じた。ところが、須佐之男命は、母のいる根之堅州国に行きたいと泣き喚いていた。その泣き方があまりにも激しかったので、青山は枯山となり、川や海は枯れ果て、悪い神が満ちて、多くの災いがおこった。伊耶那岐命は、須佐之男命の泣く理由をきいて大変に怒り、これを追放した。

## 【日本書紀 五の〇】

(イザナキ・イザナミノミコトは、海、川、山、木、草の神を生んだ。)既にして伊奘諾尊・伊奘冉尊、共に議りて曰はく、「吾已に大八洲国及び山川草木を生めり。何ぞ天下の

主者を生まざらむ」とのたまふ。是に、共に日の神を生みまつります。大日靈貴と号す。大日靈貴、此をば於保比屢咩能武智と云ふ。靈の音は力丁反。一書に云はく、天照大神といふ。一書に云はく、天照大日靈尊といふ。此の子、光華明彩しくして、六合の内に照り徹る。故、二の神喜びて曰はく、「吾が息多ありと雖も、未だ若此靈に異しき児有らず。久しく此の国に留めまつるべからず。自づから当に早に天に送りて、授くるに天上の事を以てすべし」とのたまふ。是の時に、天地、相去ること未だ遠からず。故、天柱を以て、天上に挙ぐ。次に月の神を生みまつります。一書に云はく、月弓尊、月夜見尊、月読尊といふ。其の光彩しきこと、日に垂げり。以て日に配べて治すべし。故、亦天に送りまつる。次に蛭児を生む。已に三歳になるまで、脚猶し立たず。故、天磐櫛樟船に載せて、風の順に放ち棄つ。次に素戔嗚尊を生みまつります。一書に云はく、神素戔嗚尊、速素戔嗚尊といふ。……(後略)

### 【五の1】

一書に曰はく、伊奘諾尊の日はく、「吾、御寓すべき珍の子を生まむと欲ふ」とのたまひて、乃ち左の手を以て白銅鏡を持ちたまふときに、則ち化り出づる神有す。是を大日靈尊と謂す。右の手に白銅鏡を持ちたまふときに、則ち化り出づる神有す。是を月弓尊と謂す。又首を廻して顧眄之間に、則ち化る神有す。是を素戔嗚尊と謂す。……(後略)

### 【五の2】

一書に曰はく、日月既に生れたまひぬ。次に蛭児を生む。此の児、年三歳に満りぬれども、脚尚し立たず。……(後略)

### 【五の6】

一書に曰はく、伊奘諾尊と伊奘冉尊と、共に大八洲国を生みたまふ。然して後に、伊奘諾尊の日はく、「我が生める国、唯朝霧のみ有りて、薫り満てるかな」とのたまひて、乃ち吹き撥らふ氣、神と化爲る。号を級長戸辺命と曰す。亦是級長津彦命と曰す。是、風神なり。又飢しかりし時に生めりし児を、倉稻魂命と号す。又、生めりし海神等を、少童命と号す。山神等を山祇と号す。水門神等を速秋津日命と号す。木神等を句句廻馳と号す。土神を埴安神と号す。然して後に、悉に万物を生む。火神軻遇突智が生るるに至りて、其の母伊奘冉尊、焦かれて化去りましぬ。時に、伊奘諾尊、恨みて曰はく、「唯一児を以て、我が愛しき妹に替へつるかな」とのたまひて、則ち頭辺に匍匐ひ、脚辺に匍匐ひて、哭き泣ち流涕びたまふ。其の涙墮ちて神と爲る。是即ち畝丘の樹下に所居す神なり。啼沢女命と号く。遂に所帯せる十握劍を抜きて、軻遇突智を斬りて三段に爲す。此各神と化成る。復劍の刃より垂る血、是、天安河辺に所在る五百箇磐石と爲る。即ち此経津主神の祖なり。復劍の鐔より垂る血、激越きて神と爲る。号けて甕速日神と曰す。次に燖速日神。其の甕速日神は、是武甕槌神の祖なり。亦曰はく、甕速日命。次に燖速日命。次に武甕槌神。復劍の鋒より垂る血、激越きて神と爲る。号けて磐裂神と曰す。次に根裂神。次に磐筒男命。一に云はく、磐筒男命及び磐筒女命といふ。復劍の頭より垂る血、激越きて神と爲る。号けて閻靄と曰す。次に閻山祇。次

に闇罔象。然して後に、伊奘諾尊、伊奘冉尊を追ひて、黄泉に入りて、及きて共に語る。時に伊奘冉尊の日はく、「吾夫君の尊、何ぞ晚く来しつる。吾已に滄泉之竈せり。然れども、吾当に寢息まむ。請ふ、な視ましそ」とのたまふ。伊奘諾尊、聴きたまはずして、陰に湯津爪櫛を取りて、其の雄柱を牽き折きて、秉炬として、見しかば、膿沸き虫流る。今、世人、夜一片之火を忌む、又夜擲櫛を忌む、此其の縁なり。時に伊奘諾尊、大きに驚きて曰はく、「吾、意はず、不須也凶目き汚穢国に到にけり」とのたまひて、乃ち急に走げ廻歸りたまふ。時に、伊奘冉尊、恨みて曰はく、「何ぞ要りし言を用ゐたまはずして、吾に恥辱みせます」とのたまひて、乃ち泉津醜女八人、一に云はく、泉津日狭女といふ、を遣して追ひて留めまつる。故、伊奘諾尊、劍を抜きて背に揮きつつ逃ぐ。因りて、黒鬘を投げたまふ。此即ち、蒲陶に化成る。醜女、見て採りて噉む。噉み了りて則ち更追ふ。伊奘諾尊、又湯津爪櫛を投げたまふ。此即ち、箭に化成る。醜女亦以て抜き噉む。噉み了りて則ち更追ふ。後に則ち伊奘冉尊、亦自來追でます。是の時に、伊奘諾尊、已に泉津平坂に到ります。一に云はく、伊奘諾尊、乃ち大樹に向ひて放屍まる。此即ち巨川と化成る。泉津日狭女、其の水を渡らむとする間に、伊奘諾尊、已に泉津平坂に至しませぬといふ。故便ち千人所引の磐石を以て、其の坂路に塞ひて、伊奘冉尊と相向きて立ちて、遂に絶妻之誓建す。時に、伊奘冉尊の日はく、「愛しき吾が夫君、如此言はば、吾当に汝が治す国民、日に千頭縊り殺さむ」とのたまふ。伊奘諾尊、乃ち報へて曰はく、「愛しき吾が妹、如此言はば、吾は当に日に千五百頭産ましめむ」とのたまふ。因りて曰はく、「此よりな過ぎそ」とのたまひて、即ち其の杖を投げたまふ。是を岐神と謂す。又其の帯を投げたまふ。是を長道磐神と謂す。又其の衣を投げたまふ。是を煩神と謂す。又其の禪を投げたまふ。是を開嚙神と謂す。又其の履を投げたまふ。是を道敷神と謂す。其の泉津平坂にして、或いは所謂ふ、泉津平坂といふは、復別に処所有らじ、但死るに臨みて氣絶ゆる際、是を謂ふか。所塞がる磐石といふは、是泉門に塞ります大神を謂ふ。亦の名は道返大神といふ。……(後略)

### 【五の8】

一書に曰はく、伊奘諾尊、軻遇突智命を斬りて、五段に為す。此各五の山祇と化成る。一は首、大山祇と化爲る。二は身中、中山祇と化爲る。三は手、麓山祇と化爲る。四は腰、正勝山祇と化爲る。五は足、雝山祇と化爲る。是の時に、斬る血激灑きて、石礫・樹草に染る。此草木・沙石の自づからに火を含む縁なり。

### 【五の9】

一書に曰はく、伊奘諾尊、其の妹を見まさむと欲して、乃ち殞斂の処に到す。是の時に、伊奘冉尊、猶生、平の如くにして、出で迎へて共に語る。已にして伊奘諾尊に謂りて曰はく、「吾が夫君尊、請ふ、吾をな視ましそ」とのたまふ。言訖りて忽然に見えず。時に闇し。伊奘諾尊、乃ち一片之火を挙して視す。時に伊奘冉尊、脹満れ太高へり。上に八色の雷公有り。伊奘諾尊、驚きて走げ還りたまふ。是の時に、雷等皆起ちて追ひ来る。時に、道の辺に大きな桃の樹有り。故、伊奘諾尊、其の樹の下に隠れて、因りて其の実を採りて、雷に擲げ

しかば、雷等、皆退走きぬ。此桃を用て鬼を避く縁なり。時に伊弉諾尊、乃ち其の杖を投てて日はく、「此より以還、雷敢来じ」とのたまふ。是を岐神と謂す。此、本の号は来名戸の祖神と曰す。八の雷と所謂ふは、首に在るは大雷と曰ふ。胸に在るは火雷と曰ふ。腹に在るは土雷と曰ふ。背に在るは稚雷と曰ふ。尻に在るは黒雷と曰ふ。手に在るは山雷と曰ふ。足の上に在るは野雷と曰ふ。陰の上に在るは裂雷と曰ふ。

カグツチの血から生まれた神

記	石析神 根析神 石箇之男神 甕速日神 樋速日神 建御雷之男神（建布都神、豊布都神） 闇御津羽神	記
	○ ○ △ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	6

カグツチの死体から生まれた神

記	頭……正鹿山津見神 胸……淤濛山津見神 腹……奥山津見神 陰……闇山津見神 左手……志藝山津見神 右手……羽山津見神 左足……原山津見神 右足……戸山津見神	記
	首……大山祇 身中……中山祇 腰……正勝山祇 手……麓山祇 足……雒山祇	8

八雷神

記	頭……大雷 胸……火雷 腹……黒雷 陰……析雷 左手……若雷 右手……土雷 左足……鳴雷 右足……伏雷	記
	首……大雷 胸……火雷 腹……土雷 背……若雷 尻……黒雷 手……山雷 足……野雷 陰……裂雷	9

総合

記	ナキサハメ カグツチの血から生じた神 カグツチの体から生じた神 黄泉国訪問 八雷神 醜女が追う 八雷神が追う 桃の実を投げる ことど渡し	記
	0	
	○ ○ ○ ○ ○	6
	△	8
	○ ○ ○	9